

プリントアウトした請求票は、所蔵部署階のカウンターにお持ちください

2011年01月06日 11:44:02

2011年01月06日 11:44:03

入館証番号:

入館証番号:

Call Slip

25

<請求票>

Call Slip

3616
3321
38

<請求票> (控)

資料名 : 支那の人々

巻次 :

著者名 : 清水安三 // 著

出版者 : 隣友社 頁数 : 227p 図

大きさ : 19cm 出版年 : 1938

書名
資料名 : 支那の人々
巻次 :
著者名 : 清水安三 // 著
出版者 : 隣友社
出版年 : 1938
大きさ : 19cm
頁数 : 227p 図版29p

所蔵館 : 中央  
所蔵部署 : 1階資料お渡し・返却カウンタ

所蔵館 : 中央  
所蔵部署 : 1階資料お渡し・返却カウンター  
配置場所 : 1/261 中)2F社会(閉)  
資料ID : 1123097686

配置場所 : 1/261 中)2F社会(閉)  
資料ID : 1123097686

請求記号
3616
3321
38

—	社	人	自	東	新	力	事
—	社	人	自	東	新	請求	報告
MB 1	マイカ	B1	7ルファベット	原紙	縮刷		
MB 2	マイカ	B2	洋	中	朝		
行	1F	B1	B2				
多	兎	青	1F	B1	B2		

目録 1~3

目次 1~5

早夏 (全9巻)

本文 38~64

86~89

129~130

169~186

## 自序

書庫より、わたくしの二十二年に亘る支那生活の體驗談を書いてくれと頼まれ、引受けはしたものの、さて中々に時間に餘裕がない。北京に私が經營してゐる崇實學園は、まだ私達に給料を支拂ひ能る程に發達してゐないので、家から學校へ通ふ電車賃さへも自分持でやつて居るのである。我々夫婦で毎日行くとすれば月に十圓はかゝるのであるから相當な負擔である。それでは一體どうして暮らして行けるのかとお疑ひになるだらうが、實はわたくしは別に、メソソタイムの出張販賣員をして働いて居るので、近江セイルズ會社から月々の生活費を頂いてゐるのである。つまり、わたくしはメソソタイムの商賣と學校の仕事と二人前やつてゐるわけだ。忙しい筈である。その上に教會の用務もあるし、顧問事業も囑託されて居る。この忙しい最中に著述でもあるまいと思ふだが、斷りきれないのが私の性分である。そこで承諾を興へたのだが、前記の通りの忙しさにまぎれて、ついおびくになつてしまつた。東京の書庫からは航空便電報と矢の催促である。そこ

でわたくしは文字通り寸暇を盗んで書くこととした。わたくしは、或時は、戦火猛る第一線の皇軍慰問の使ひの途次の列車の中で、或時は數日滞在した田舎の米國宣教師の家の屋根部屋の一角で、私は到る所に、原稿用紙を持って廻つては、この本を書いたのである。だから順序もなければ筋も立つてゐない。しかし、原稿を盗み読みした友人達は、青年も、老人も、支那通も、または支那に來たばかりのものも、皆「實に面白い」と云つて呉れた。それが、本當ならばそのわけは、本書が、在支二十餘年の間に、わたくしの得た正真正銘の體驗の記録に外ならないからであらう。これは全く體驗の書き流しである。どうかそのつもりで読んで頂きたい。

加之、わたくしはこの頃、書癡といふて右の手指がしびれてゐるので、原稿の大部分は之を左手で認めねばならなかつた。これには大に惱まされたものである。

終りに一言、平素からの私見をのべさしていただくことをお敢し願ひたい。

それは「支那人に支那風を許せ」と云ふことである。私はこの一言を世に尋ねるために、この一書を上梓する氣になつたのである。その邊のことを食んで読んでいただければ幸甚と思ふ。支那人

と交り、支那人を遇するに、日本人として心得て置きたいことはこの一語にあると思ふのである。

北京にて、支那貧民の女なる

著者識

一九三八年三月十八日

目次

支那は世界、天下……………三  
 太古とモダンが雑居……………五  
 留米女性の活動……………六  
 家鴨の皮……………八  
 支那人の商法……………九  
 支那人の書法……………二  
 物の買ひ方……………三  
 支那人は考へて買ふ……………四  
 支那人は印を捺すことか能きる……………五  
 五千年七びぬ國民……………五  
 支那の儂教……………七

目次

先祖の文化を賣食ひ……………七  
 殉國といふ文字……………八  
 質よりも名……………九  
 伯夷叔齊の保護……………三  
 支那人の淺草……………四  
 語學が上手……………五  
 小鳥が好き……………六  
 酒に酔はぬ……………六  
 音樂が好き……………六  
 美術心あり……………六  
 規矩を守る……………六  
 文化人である……………七  
 儉約に懸けては世界一……………七

目次

面子に生きる……………一四  
 女性は無夢想か……………一五  
 老人を尊敬する……………一五  
 家族扶助の園……………一五  
 支那人の衛生……………一六  
 支那人を何に例へむ……………一六  
 支那人の眼つき……………一六  
 支那人は修養せぬ……………一六  
 支那人と足……………一六  
 風俗の今昔……………一六  
 支那人は誤嚥化する……………一六  
 心理は複雑……………一七  
 不潔に平氣……………一七

女は聲を上げて泣く……………一七  
 家、女料理……………一七  
 道が川……………一七  
 支那人は消極的……………一八  
 型にはめて生活する……………一八  
 痺氣を嫌ふ……………一八  
 支那の基督者……………一八  
 宗教はわからぬか……………一八  
 支那の教會……………一九  
 支那の宣教師……………一九  
 支那の牧師……………一九  
 社會は教會を置去り……………一九  
 雜誌に月遷れなし……………一九

目次

支那の社會事業……………一八  
 支那人は氣死する……………一八  
 支那の闇の女……………一九  
 椿の花……………一九  
 支那人は情死せぬ……………一九  
 支那に見出す日本……………一九  
 人妻の表現……………一九  
 妻と別居が平氣……………一九  
 女はつましい……………一九  
 支那人のお茶作法……………一九  
 支那の中産階級……………一九  
 馬は蹴らぬ……………一九  
 支那人の應接……………一九

支那人の殘忍性……………一九  
 禪の話……………一九  
 中間語……………一九  
 支那といふ名稱……………一九  
 支那人の便器……………一九  
 聖書は間違……………一九  
 手工藝の時代……………一九  
 廢物を利用する……………一九  
 なかく盗む……………一九  
 油を好む……………一九  
 砂糖は好まぬ……………一九  
 趣味は不自然……………一九  
 支那人の好む色……………一九

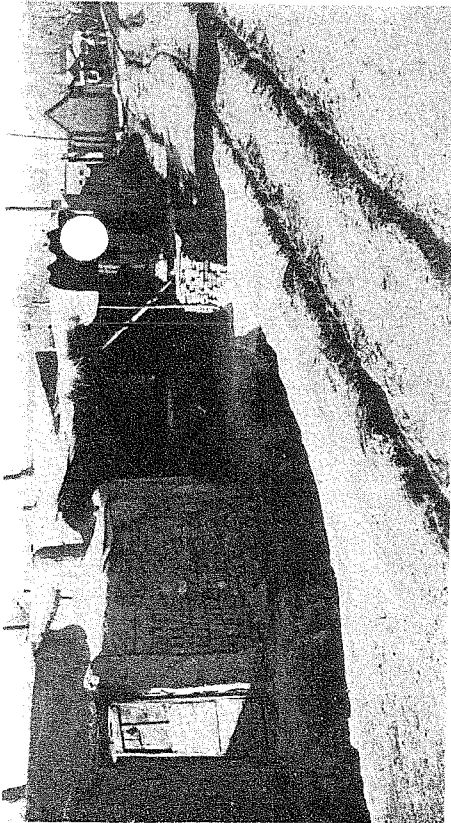
支那人の姓……………一四  
 支那を亡國に導くもの……………一六  
 支那人は自大主義……………一六  
 支那人のお茶碗……………一七  
 支那人と三國志……………一七  
 支那人は租妻する……………一八  
 支那人は罵る……………一八  
 雨を豫言せぬ……………一九  
 北京人はのろい……………一九  
 山東人は辛抱強い……………二〇  
 浙江、江西人は聰明……………二〇  
 湖南人は熱がある……………二〇  
 廣東人の協同力……………二〇

南京陥落に皆泣く……………二〇  
 西洋文化は何時まで續く……………二〇  
 東西兩文明の融合……………二〇  
 來るべき次の文化……………二〇  
 芦の湖畔の二青年……………二〇  
 無名者の遺業……………二〇  
 三百年のメジユア……………二〇  
 支那人の教育性……………二〇  
 知られざる意志……………二〇  
 人柱志願……………二〇  
 支那婦女鑑……………二〇

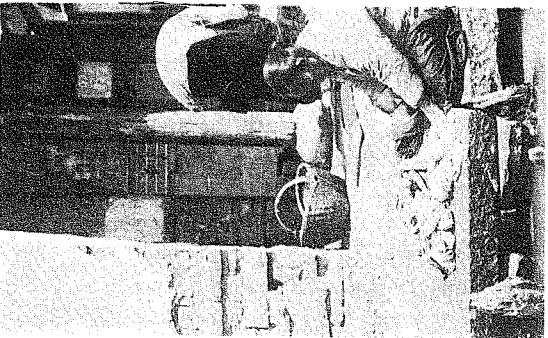
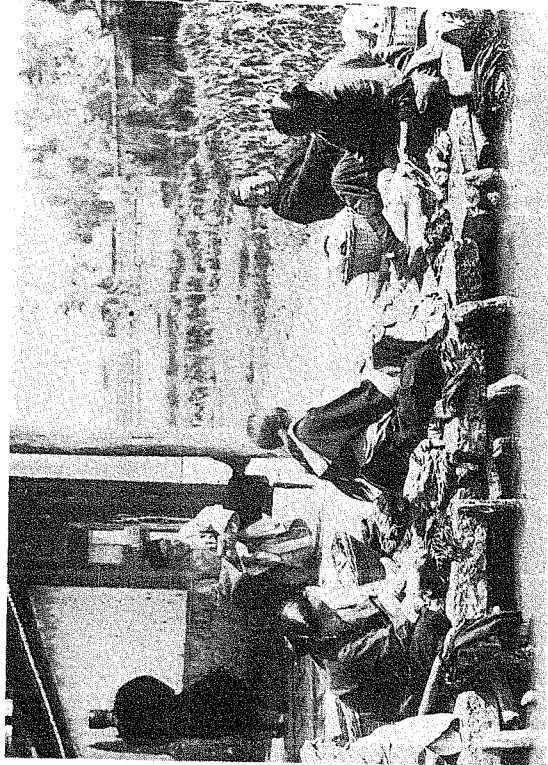
上海人は日本人に似てる……………二六  
 四川人は熱もあるが賢くもある……………二六  
 滿洲人の氣力は失せた……………二六  
 回々教は相互扶助に生く……………二六  
 附録 — 新東洋文化の建設のために —  
 唐提寺の鑑賞……………二六  
 楠公の先生……………二六  
 朱舜水の貢獻……………二六  
 ホレーズ、ペトキンの遺言……………二六  
 グリフス老人……………二六  
 黄河を下りし宣教師……………二六  
 調正踏君の苦杯……………二六  
 支那は文化の島……………二六



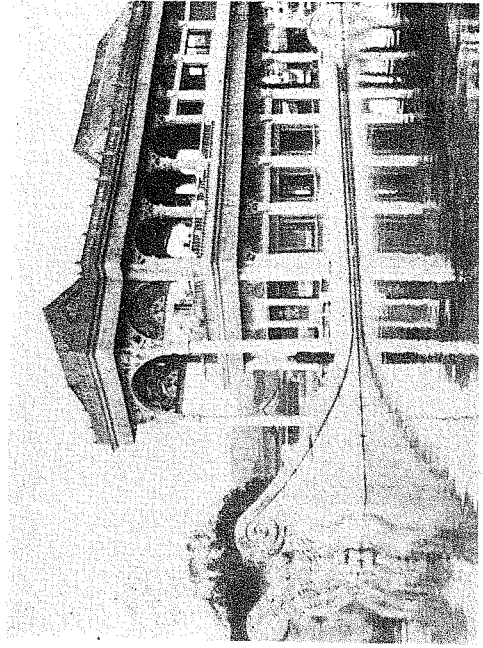
男を造る酒



砂塵の道

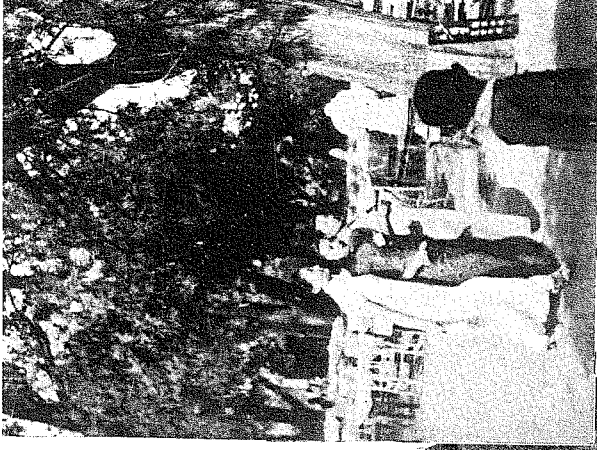


々遅日春

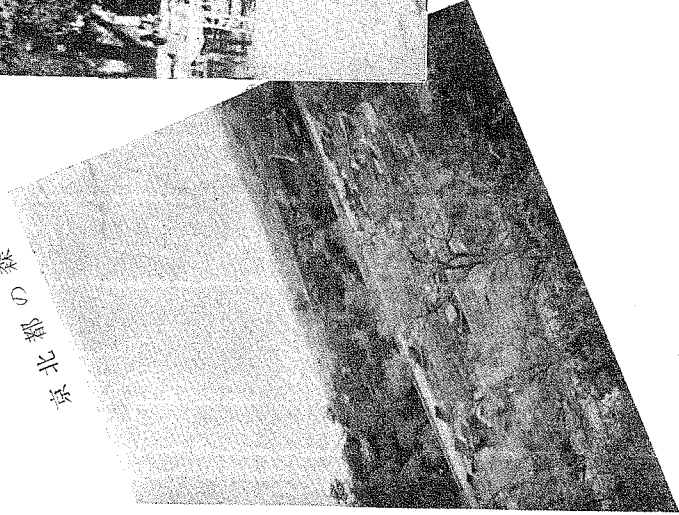


動かぬ石の船

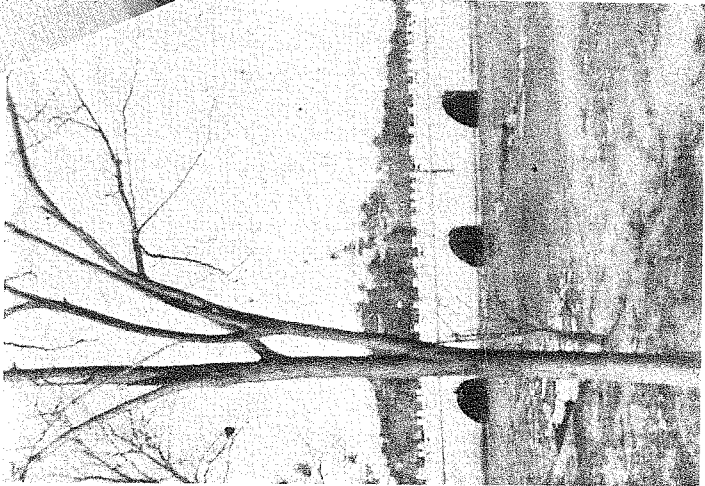
ルーガンダモるす歩間を園公



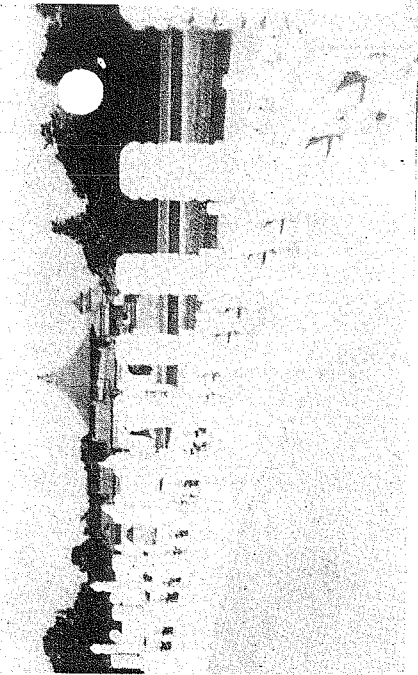
森の北の京



北京北海の白塔

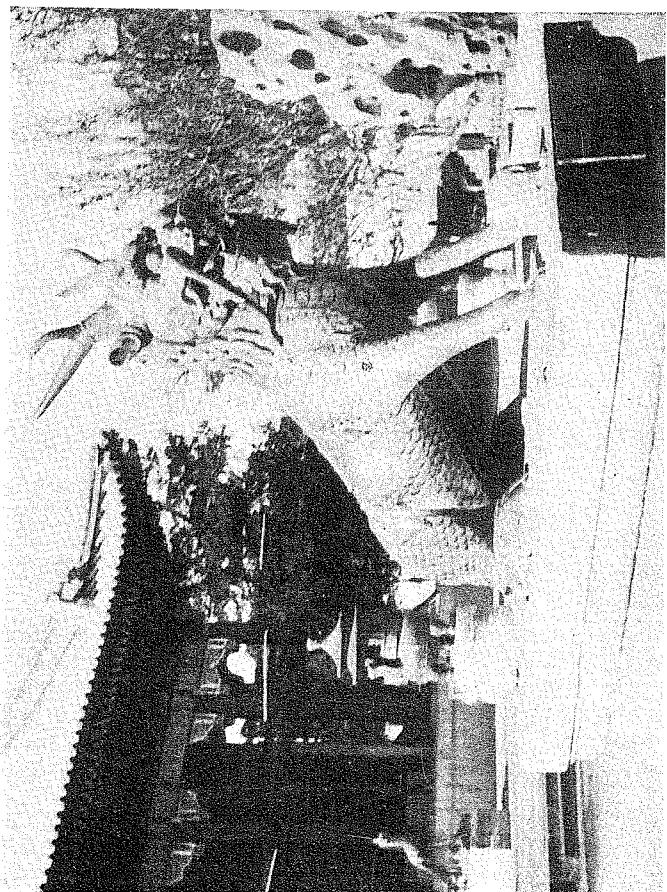
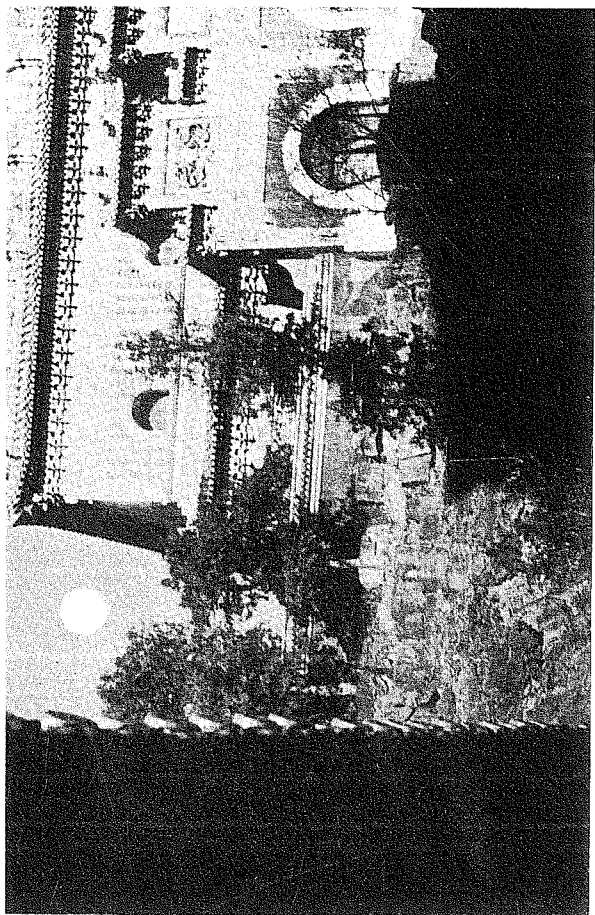


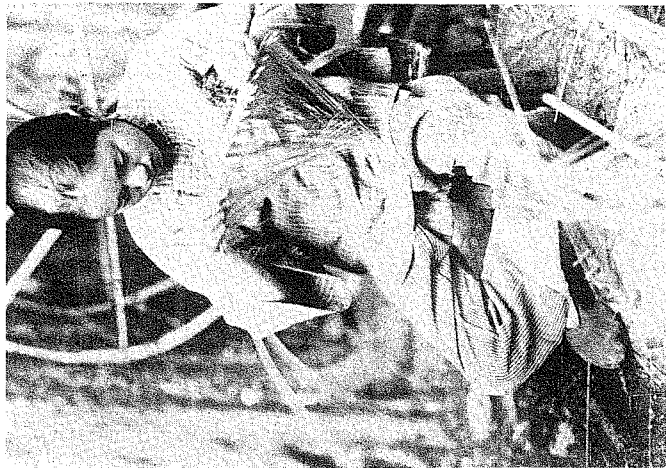
境



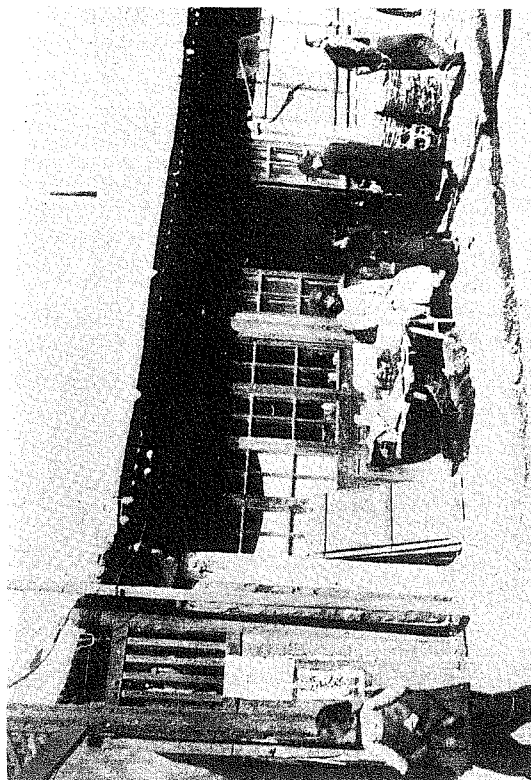


蘆壽寺山

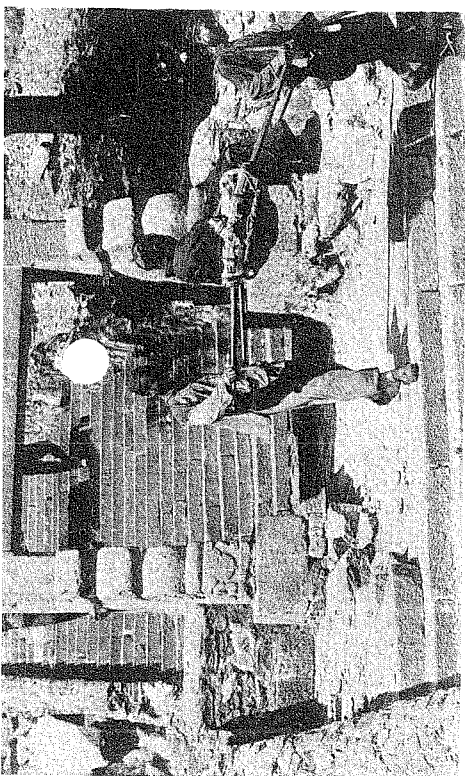




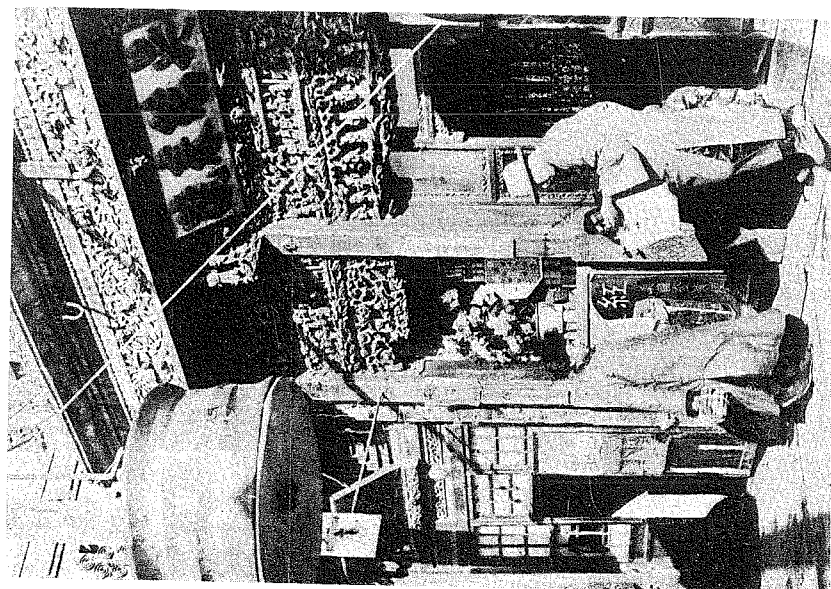
を浴びて



露店點描



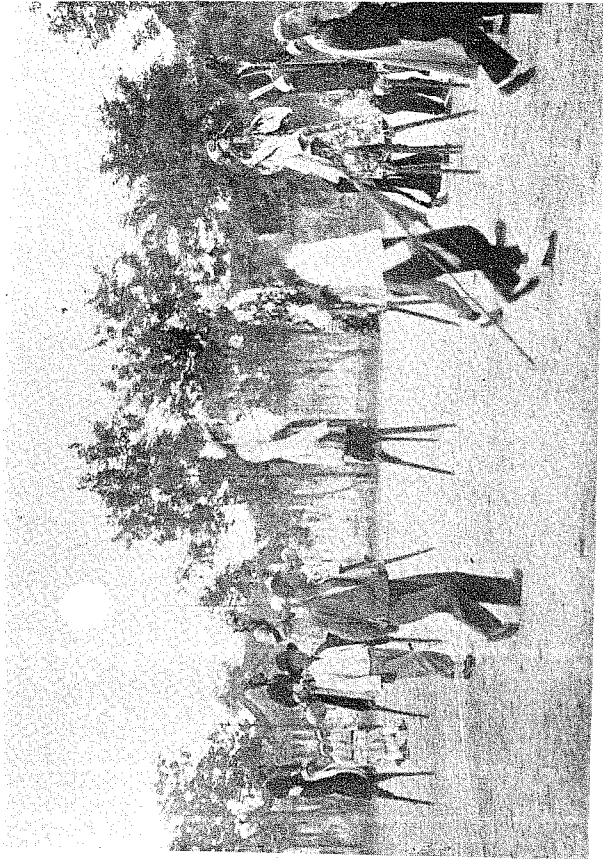
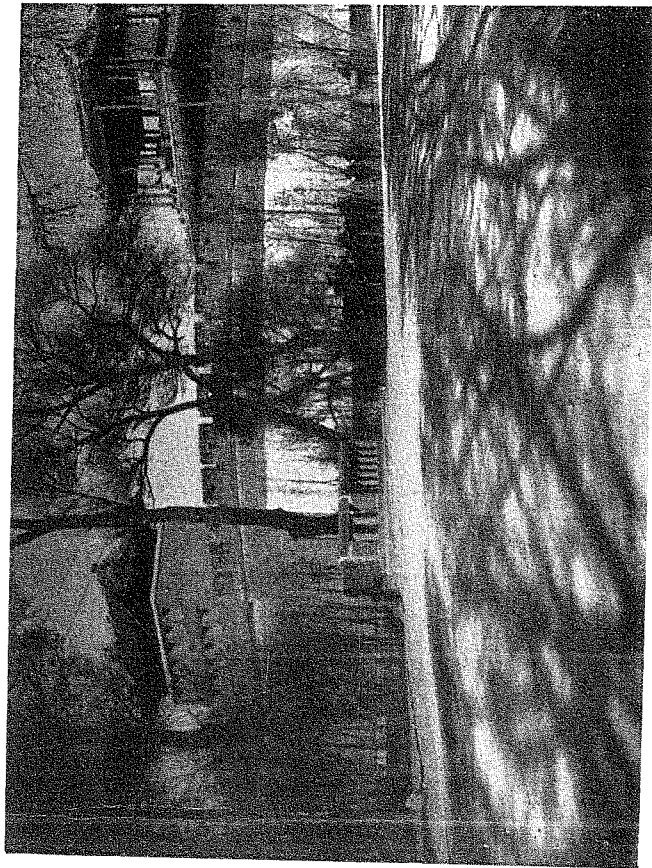
で登山



爆竹屋

支那の人々

遠城入口



それから支那では、葬式でも、結婚式でも、何でもかんでも、音楽が伴ふてゐる。

### 美術心あり

諸君は支那の散髪屋が、街頭に立つて、散髪して居るのを見受けるであらう。その散髪屋は腰掛と理髪道具を天秤棒で擔ひ歩いて居る。洗面器も剃刀もジャツキも皆その上に備つて居る。

その散髪屋の擔いで居る道具には、花模様か屹度畫いてあるではないか。

また支那の女が穿く靴には、美しい細い刺繍かしてあるし、枕の如きにも必ず刺繍かしてある。

わたくし共は、北京の細民街に學校を建て、ゐるものであるがあまりに彼等が貧乏であつて、娘達が廿錢廿錢で、貞操を切賣るのを見るに見兼ねて、この附近の女性に

種々なる手工藝を教授して見た。始めは、靴下編の器械を買つたり、タオル織を教へて見た。ところがそれは失敗に終つて、反つて挑花、布花といふやうな美術的な上等品が出来上り、廿年ばかり立つた今日では一年に五百萬圓もの品物が、海外へこの細民窟より輸出できるやうになつた。

何がかく成功せしめたかといふに、いふまでもなく、この國の人々が、美術的であつて、美術心があるからである。

### 規矩を守る

わたくしは、支那人が、道德的國民であるとは思はぬ。けれども、支那人は「規矩」を守る國民だと思ふ。

よく支那人と話してゐると、それは「規矩」だとよくいふのである。支那人は日本の商

人などよりも、支那がよくて、殆んどかけ倒れといふものがない。わたくしは北京まで行っても、八十軒からの薬屋に、マンソレータムを御ろして居るが、殆んど回収不能といふものに出くわさない。

これの如きも、支那の「規矩」であつて、別に道德的の意義あるものでない。また支那人は、よく贈物をしたり、いろんなことをするが、それも「規矩」であつて、別に精神的意義あるものではない。日本で俗にいふところの、お心を頂戴するだけの心の籠つたものではない。

最も面白い例は、支那の筈子といつて、遊女屋にも「規矩」がある。若しも友人と二人で行つて妓女とお茶を飲んだとする。するとその妓女は、その何れが自分をしらせて呉れしかを問ふのである。そうして、自らをしらせし男へよりも、その男の客人によくお茶をくみ話かけて、響應することを忘れぬ。けれども、それだからとい

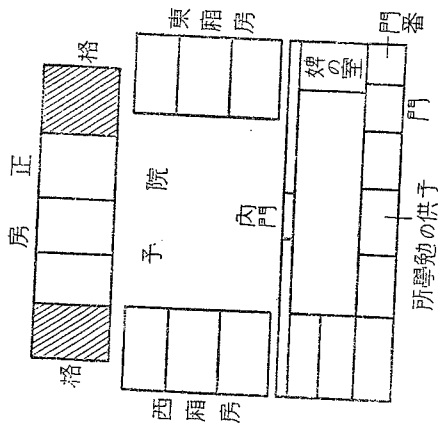
つて次の折に、その客人が一人で行つて、この間、自分の友人がしらした妓女が、可愛かつたといふので、こつそりその妓女を呼んでも、その妓女は斷乎として相手とならない。

それと同じく、支那では一等の妓樓を班子といひ二等を茶室といふが、その何れかの一つの妓樓に上つて多くの妓女の中から一人を呼んで、打茶園といつて、お茶を飲み、西瓜の種を嚼じつたとする。そうして、次の折にまた同じ妓樓に上つて、他の妓女を呼ばんとしても、それは「規矩」が許さなから、殆んど絶対に不可能である。

支那人は、町内つき合ひ、さては妻妾の關係、父子の生活交渉悉く「規矩」にさまつてゐる。例へば支那の家は、小さい幾棟もの家屋の複合からなつてゐる。

その正房には、主人と正妻が住み、廂房には種々の家族が住み、娘は格に住む。それであるから娘の結婚のことを出格といふのである。

家屋の住み所すら定つてゐる位何もかも規矩生活である。



註 これをよみし若者がいふに、この規矩の如きは前清時代はそうであつたが、今は滅茶苦茶なとのこと。そしてそれを滅茶苦茶にさせたものは、支那人以外の國民だとのことだ。附言して置く。

### 文化人である

支那人は決して野蠻人ではない。ある意味からいへば、彼等は日本人や歐米人よりも文

化人であるといふことができる。

極く田舎に行つても、支那人の顔は目も鼻立もよく揃つて、決して、ゴリラのやうな顔をしては居らぬ。殊に支那人の少年少女時代の顔は、顔形が實によい。その聰明そらな腫その愛くるしい表現は、世界何處の少年少女よりもよい。そしてその年頃の顔は、頬が低く鼻が高く、口角が少しも尖つて居らぬ、實に文化人の人相である。

西洋人や日本人は、成人の方が若いものよりも、さりつとした顔してゐて、立派であるが、支那人は、少年少女時代が一番よい。そして本當に賢さもその少年少女時代が絶頂である。よく日本では、少年少女は、口喙が黄いといはれたり、四十五十の分別盛といふが、支那にはさういふ俚言がない。

どうして、支那人が、その少年少女に於て顔が輝くかといふに、それは多分、支那民族が、隋、唐、宋に於て黄金時代を経て來たので、それが系統發生の理で以て、人間の一生にずつと繰返へされるのではないかと思ふ。

すなはち人間が母胎の中で、おなまじやくしから人間までをずつと、幾千萬年の人類の歴史を一通り繰返して生れ出で、生れてから後は、支那民族史を一生かゝつて繰返へすものらしい。それであるから、支那の如き、衰退する民族は、その少年少女時代にかへつて顔が輝くのではあるまいか。

その爲めか、支那人は少青年の頃に、實に優しい心情を持つてゐて、日本人や西洋人の少青年の如くに、少しも粗野ではない。西洋人や日本人は青少年の時には實に荒つぱくて、野性で、誰も少々亂暴するものであるが、支那人の青少年は、非常に洗練されてゐる。

青年ばかりでなく、支那の田舎者も非常に禮儀應酬をわきまへて居る。田舎者をボイにつかつてみると、日本の山出しものと違つて、實にやさしく、實にあとなしい。どんな田舎に行つても、素足に靴を穿てゐるものも、腿を出してゐる男もなく、肌

を見せる女、路傍で小便する女性を見出さない。

そして、男と女の喧嘩をよく見受けるが大の男が、女に罵られて、手も足も出ないのである。男は必ず負けときまつて居る。これも支那人が、假令目に一丁字なくつても、文化人である證據である。

### 儉約に懸けては世界一

わたくしは百姓の子ではあるが、薩摩芋はどんな畑にできるかを知らなかつた。何となれば、わたくしの郷里の村は、上田ばかりで、一反に十俵もとれる土地であるから、薩摩芋など作つたことがない。

去年わたくしは、北京で、學校の空地に薩摩芋を作つたところが、芋は小さいもので、さつぱりうまくなり、筋ばかりであつた。そこで色々研究して見たところ學

校の空地は非常に肥沃なる菜園であつて、芋を作るには、餘りに肥沃であつたことがわかつた。

そうと解つて見れば、少年の頃食つた、甘かつた芋は、饗庭野といふ第三紀層の赤土の痩せた土地で、雑草の外に何も生えてゐぬ土地で取れたのを、買つたのであつたことを思出す。芋は痩せ地であるから、何とかして、養分を貯蓄し置かんとして、根をはらしたものである。

丁度そのやうに、支那は支那そのものが瘦地同様であつて、國內戦は年として起らざることなく、その上に外國とも事を構へるといふわけで、國民は不安と困難に出逢ひ通しである。かゝる國民が自ら有するものは、貯蓄心である。

一寸考へると、お金持の國民が、お金を貯へ、食しい支那人など鍬一枚持つてゐぬ如くに見ゆるが、それは、肥沃な土地で、薩摩芋が實らずして、反つて瘦地でうまい大

さい芋がとれる原理を知らぬ人々のいふことである。

諸君は、支那の車夫が、十錢札ではあるが、しこたま何十圓と、數へてゐるのを見受られるであらう。それは決して珍らしいことではない。

もつと面白ろいことは、支那人が、日本へ留學中と雖、お金を貯へることである。わたくしの知る學生は一人の有志の實業家から出資して貰つて、留學したが、十年間に一千何百圓も貯金した。またもう一人の女學生は、學費を、あちこちの日本の同情者にダグつて出して貰つて、それは何千圓かをためて歸つた。これの如きは到底想像できぬ現象であると思ふ。

## 面子に生きる

支那人位面子を重んずる國民はあるまい。面白ろい國民である。

面子に生きる



アーサー・スミスの支那の國民性といふ本は古い本であるが、殆んど古典として讀まれて居る。この書物の中に、面白い挿話が載つて居る。或る時二階の露臺から見てゐると、一人の支那人の牧師がやつて來た。ちつと見てゐると、葡萄棚の下で、その牧師が一房の葡萄をちぎりとつてゐる。その葡萄は、實としてよりも花でもあるかのやうに、愛玩してゐたのであるからして、びつくりして、その牧師の支那人が來るなり、之を嚴しく、詰つたのである。すると彼が何といふかといふに、

「我は盜らず」

と一言して、わるかつたとも何ともいはない。

「それでも、この二つの眼が、確に見た」

といふと支那人の牧師がいふに、

「あなたは私の面子をこわす」

といつて、非常に憤慨したさうである。人の面子よりも、葡萄の一房の方が大切であるかといつて、喰つてかかつたさうである。

曾て日支間の外交を交渉が、道歉といふ、いや得罪でなければいかぬといふ風に、伸長びいたことがある。道歉は regret であつて、得罪は apology の謂ひである。

支那人は、面子を重んずるから、片言隻句といふ雖、なか／＼承知しないのである。

面子を體面ともいふが、支那人は乗物までも、面子にかゝはるから、つひ隣といふ雖、自動車を雇ふて行く。それであるからして、どんなよい人の紹介狀を持つてゐても、やはり、自動車に乗つて、訪問するのがよい。そうせぬと、番門的のボーイが名刺を握つて、刺を通じてくれぬことがないとも知れない。それは當世ばかりでないと見え、孔子といふも、顔回の死んだときに、幾何葬費に窮したからとて、決して自分の乗り物は賣り拂はなかつた。それはやはり、魯侯が召のときに、乗物がなくては困るから

であつた。この點昔も今も同じである。

## 女性は無愛想か

支那の女が無愛想であるといふ。日本の女のやうに、路傍の人、見知らぬ人にまで、愛嬌をふりまくのもどうかと思ふが、支那の女のやうに、木で鼻をかむが如く人に接するのも、餘に女性の本質に反すると思ふがどうか。

日本の女性は、人に物言ふときは、微笑むか、それとも、目元に小皺をよせて、愛嬌たつぷり物いふか、それとも、日本女性は、口に筆をあて、目をうるませて口さくやうだ。然るに支那の女性は實に無愛情である。

雷に良家の娘達が、さうであるのみならず、妓女の如きでも、ぶつさら棒であつて容易によい顔をせぬものである。

これはどういふ譯で、さうであるかといふに、支那では賣笑といふ言葉がある如く笑ふことは、賣淫程でもないが、半ば心を許すことである。彼の西洋人のキツと同じであつて、そう容易に女性は愛嬌を振り蒔かぬことになつてゐるのである。

昔殷の紂王は王妃の笑みを獲んとて、炮烙の刑をやつたといはれて居る。炮烙の刑といふは、眞赤に焼ける鐵の橋を、囚人に渡らせるので、そのころげ落つるのを眺めて、道の王妃もにいつと笑つたといふのである。

尤も、この話は書經にさら書いてあつても疑はしく、竹書紀年には紂王が王妃を獲たのは、彼が炮烙の刑を始めたのよりも、何年か後になつて居るけれども、この物語で支那の男性が、女性の笑みを獲得せんと欲すること及び、支那の女性が、容易に笑みを與へぬことも、よくわかると思ふ。

支那の女性が、特に日本人に無愛想に見えるもう一つの理由は、彼等がする返事の

言葉が日本の言葉と、逆であるからである。支那の娘が、一番親しんで答へる言葉はウムといふ言葉である。何をいふてもウンとかウムといふて、男性の如く、是々といさぎよくはない、日本語など、うんといへば、何か、父親が、子供に與へる返事かそれとも、上官が、下僚にする諾「いゝ」の意である。然るに、支那の娘は、好んでこの言葉を用ひる。そして怒つたときには、幹壓といふのである。何ですかの意である。

しかし敢ていふのだが支那の女性は、わたくし等にとつては、日本の女性よりもやさしく、そして愛嬌よく見える、長い／＼間多くの支那の女性の師父となり來れるためか、支那の女性が、わたくしに對すると、胸襟を披いて來る。初對面の女性でもにこ／＼笑みて、十年の知己の如くに、何もかも、打ちあけて語る。少しもへだてがない。今この文を、順徳のミッションスクールの一室で、書いてゐるが、昨日はその

ミッションスクールの美しく若い女教員と共に、食卓を共にしたが、わたくしが尋ねもしないのに、自分の嘗めし人生の苦杯を語つてこれからの後半生を如何に生くべきかについて訊くのであつた。

日本の女性の如くに、成る程、名も知らぬ人々に、にこ／＼愛嬌よく物いふことはようせぬが、親しくなるとか、信すべき人とわかれば、とても／＼愛嬌よく、そして、この女性も、自分を愛慕してゐるのではないかと、どれも、これも、そう見えることすらある位である。

## 老人を尊敬する

事變前に、江亢虎といふ有名な、人物に依りて、發起されて、北京にも中外文化協會といふものが開かれた。その第一回の總會に於て董事が選ばれた。董事とは理事の

ことである。そしてその理事の顔觸は、驚いたことには一名の例外もなく、髯のある人々だつた。勿論山手髯もあれば關羽髯もあり、それから天神髯もあつた。支那人は、六十又は七十を越えざば、顎に髯を生やさない。それであるから、畢竟するに、彼等は、老人を選んだわけである。一寸支那でないとならないことである。

家族に於ても、老父母は、一家の親愛的的であつて、日本に於ける老人の如くに、その頑瞑を持て餘されて居るやうなものではない。

### 家族扶助の國

支那が、家族制度の國であるかどうか知らないが、支那人は、家族相互の扶助をやる。親戚のものがあぶれて、食ふに困ると、一年でも十年でも之を養ふて居る。さういふ風であるから、一人がよい仕事にありつき、少し懐具合がよくなると、親戚の

誰彼となく、その腕にぶら下るからして、この國の人々はその生活が容易なことではない。日本でも、脊せ腕に、兄の遺兒だの、弟の嫁だのと、かかつて來ることもないではないが、支那とは、その程度が違ふやうだ。

わたくしの學生に、賀といふのがあつたが、夫は病院に勤めて居る。彼女は自分の母を、養つて居る外に、兄の嫁と一人の女の子を扶養して居る。兄が若くして死んだのである。兄の妻はまだ三十になるかならぬ女であつたから、再婚したらどうかと思つたが、再婚を一寸勧めたら、死ぬといつて悲しんだので、それもその上持出せずもう彼は十年も、食客さしてゐる。而かも子供を連れて。

さういふ次第であるから、支那の食客は三杯目にはそつと出すといふ風に、遠慮なくして居らぬ。随分平氣である。

この食客の風俗は實に、親類の失業者ばかりでなく、友人でも同じであつて、二人

や三人の食客位平氣であつて、ボーイの如き薄給者でも、食客を持つて、いらだちもせぬば、いやな顔もせず、當り前な位に思つてゐる。それには連の日本人も顔まである。

## 支那人の衛生

支那位い、非衛生的な國民はまたとあるまい。然るに、支那の人口は四億何千萬と殖まこの廣い大陸到るところに住み、その勞働力の旺盛なる他民族は到底これに割込むことを得ない。

どうして、このやうに、衛生狀況の悪いのに、この國の人々は、體が丈夫なのであろうか。そこには眞迷ふことの能きない、一種の衛生學がある。その一つは、彼等は冷いものを決して食はぬ。冷飯も食はぬば、水も飲まぬば、冷いものは何も口にせぬ。

わたくしの學生の頃に、京都で厦門から來たところの支那の學生を預つてゐたことがある。彼にお辨當を持たせて、學校にやつても、決して、それを食つて來ぬ。それで訊ねると、冷飯はよう食へぬといふのである。わたくしは、冷飯を食はぬとは、贅澤だといふので、大に叱責して、その不心得を詰つたことである。そしたら、冷飯を食はぬばならぬなら、歸るといつて、倉皇として歸省した。そしてわたくしはこの國に來て、この國民が一人の例外もなく冷飯を食せぬのを見て全く驚いた。

かういふ蒼蠅の多い國であつても、熱いもののみを口にして居れば、心配ないわけである。西洋人は冷水を好んで飲み、日本人は冷い食物を味ひ、そして支那人は、熱い舌を焼き、唇を焦すやうな食物をのみ取る。その對照實に面白いではないか。

日本人は冷えた茶、なまぬるの温いお茶を飲むが、支那人は熱くないと、お茶は飲まない。日本人はお茶を一度湯ざましに入れて、そしてお茶を立てるにも拘らず、

支那人は、熱湯をのみお茶に用ひる。それであるから、日本人が少々冷えるのを待つて飲まふとすると、支那人は、ぬるくなつたから、代へませうといつて、折角少々さめたお茶を、ぶちあけてまた熱いのを注ぐのである。

こういふこともやはり、蒼蠅の多い國ででき上りさうな風俗である。

わけて、支那人は食器を洗滌するのに、極めて僅かなる水を用ひ、きたならしいふきんで、拭ふのであつて、時には、ふきんで拭ひこするだけで置くのであるから、かうして、熱湯によりて、お茶を入れることが、衛生上必須のことなのであらう。

また支那人は、とにかくを食ふが、これらの食物は、胃袋や腸の中で、殺菌消毒の效用を爲すものである。支那人は日本人の如く潔癖でないから、手を洗つたり、アルコールをガーゼにしまして持つて歩いてるわけでないから、自然胃袋の中で、食物を消毒するのである。

右、述べしことは、只一例であるが、支那人の衛生法は、つまりこういふ不潔な國では家や身體や、手足や食器や門を到底も、乾潔にできないので、自分の口の出入を非常に嚴重にし、湧騰したものでないと、飲まぬ食はぬといふことに決めてるのである。諸君は支那料理を頂くときに、うつかりすると舌をやき、びつくりすることがあらう。支那の食物は大抵、湧騰點に達せしものである。

### 支那人を何に例へむ

支那人を燃えぬ油に例へれば、日本人を酔へぬ酒に譬へることが能きる。支那人を牛とせば、日本人は馬である。

支那人は雑草である。雑草は幾ら踏みにつつても、いつの間にか生えて来る。之を根絶ねこそぎにすることは不可能である。

支那の底力の強さは、その雑草の強さである。奉天の千代田通、青島の山東街、天津の曙街、大連の浪速街等の目貫の大きい店舗は、大抵皆、支那人が所持して居る。彼等の國家は、彼等をバツクすべき何等の力を持つて居らぬ。然し乍ら、彼らは恰も雑草がはびこるが如くに何時の間にか地皮を覆ふて仕舞ふ。

また支那人は犬ではなくて、猫である。犬のやうに、そう尾ばを振つて、感謝の意を表したり、また、人なつこくはない。猫の如く、のそりくしてゐて、表情多くはない。

支那人は花ならば、櫻や椿やバラの花でなくして、稻や麥の花である。

### 支那人の眼つき

嘗て、わたしが、米國にありし頃、汽車の中で Which "Nose," とたづねられたが

何のことが解らなかつた。そうすると暫くして Japanese or Chinese? とさつたので始めて解つた。

そこで暫くしてから、そんならあなたは Which "Key,"? Monkey or Yankey? と問返へしてやつて、胸がすうつとした。それは餘談として、兎に角、日本人は、支那人に似てゐる。しかし乍ら、大體において、日本からの旅行者は、男女ともに洋服を着てゐるし、カメラをさげてゐるし、それから足が曲つてゐて短かい。しかしそれよりも、違ふことは、支那人と日本人との區別は、眉毛と目との間にあらはれてゐる。日本人の目は水々してゐるし、支那人の眼はうるんでゐる。

日本人の眼は眼尻が狐のやうにつり上りけはしく、支那人の眼は象の眼のやうに笑つてゐる。こゝろに、口でいつた支那では、よく説明できない、支那人の中で、この奴、狐手ではないかとあやまれるやうな男は日本人に似てゐる。狐手とは、すり

ピクポケットのことだ。そして日本人の裡で、仙人のやうな顔した男は、支那人によく似た日本人である。

### 支那人は修繕せぬ

支那人の國民性として、最も目立つてゐるのは彼等が物を修理、修繕せぬことである。京漢線の石家莊に太興紗廠といふ紡績工場がある。それを皇軍に委託されて、鐘紡が逸早く經營し居るのを、わたしは、一月二十六日に參觀した。その工場は、わたしの山學時代の先輩で、同郷の堀井又造氏が専ら經理に當つて居られたので、くわしく參觀するを得た。

堀井氏の説明に依ると、その器械は立派なものであるにも拘らず、手入れが悪いために薩張能率(さくちやうのり)が上らぬさうである。殊に發電所の如きは、パイプが破れて、蒸氣が吹き

出しても、吹き出すまゝに使つて居たさうである。

支那の紡績事業が、どうして赤字ばかり出して、邦人經營のものに、追従できなかつたかを、その説明に依つてうなづき得たのである。一體に支那人は修繕嫌ひであつて、もう使へなくなるとことんまで、放つて置くものであるから、手遅れして、つひに手にあへなくなるのである。

諸君は街頭に於て、支那人が、綿のはみ出たる服を着てゐるのを、よく見受けるであらう。而かもそれが男性なれば、まだしものこと、女性ですら、破れたまゝで、つゞくらずに着歩いて居るのをよく見受ける。

學校でも、椅子の籐が破れると、破れたら破れたまゝで、椅子の下に、お臀の肉をよきつと出し乍ら腰掛けて居るではないか。そして、その椅子の釘がゆるんで、腰掛けると、きつこくと動くやうになつても、まだそのまゝ、教員達は使用して居る。



そしてそれがベチャニコに潰れて仕舞ふともうそのまゝ、打つちやつて置く。

こういふ國民性であるから、支那の名所古跡にしても、満足に保存されてゐるものがないのである。古寺の屋根には草が茫々と生えてゐる。あたり憎しい名橋の大理石も、支那に在つては、聲なしである。尤も三千年もの長い歴史であるから、名所舊蹟を一々手入れして保存して居つたら最後、國民は擧つて博物館の番人になつても足らぬかも知れぬが、しかし、勿體ないものであると思ふ。

餘計なおせつかいではあるかも知れぬが、支那人が民族的に退嬰して下つて行くのを、喰止めて、上り坂に上向ける一歩は、ほころびのひどく大きくならぬ間に、物に手入れすることから始めねばならぬ。この點、痰吐くなどか、左側通行せよ等叫んで、國民生活立直しを設計せし新生活運動の人々と雖、自國民の最も缺けるところの急所について居らぬと思ふが如何。

## 支那人と足

支那人は、都會と田舎の區別なく、足を包んでゐる。どのやうに食しくても、彼等は裸足で歩くことはない。

今日もわたくしは、一人の學生の宅を訪れたが、彼女はもう二人の子供の母である。その小さい方の子供はまだ一つか、それとも生れて十ヶ月位の赤坊であつたが、丁度靴下を穿かずに居つた。わたくしが室に入るなり先づ、その赤い小さい足に、白い毛糸の靴下をはかせるためにその母は急ぐのであつた。

素足を見ては、支那人は、顔をもむけるのである。支那人の足の指に對する態度は西洋の女性が、お乳を見せながらないと丸で同じである。で足の指は支那人にとつてタブーである。

ら。昔周の末期に、戦國時代が長くつゞいて、群雄割據相争覇したものであるから、道路、交通がよくなった。それが故に、秦の始皇が封建國家時代から、統一國家の時代に世を移すことを得たのである。そして、交通がよくなると、物資が動くやうになる。そこで、商賈が盛んになる。彼の陶朱といはれる大商人は、その時代に現れたのであつて、范蠡の如きは、方向變換して、商人となり、陶公となつたのである。

支那人の商家には、よく陶業盛昌などと書いてあるのは、范蠡のことをいつたものである。「時に范蠡なきにしもあらず」と見島高徳は詩吟してゐるが、もう交通がよくなつたので、遠うの昔に彼は商人となり、百萬長者となつて、臥薪嘗膽などしてゐはしないのである。

### 支那人は消極的

南開大學の張伯苓氏は、「基督教は己れの欲するところを他にも施せといふが、儒教は己れの欲するところを施す勿れと教へる。前者は積極的で、後者は消極的である。西洋人の如くに、積極的ばかりでも行かぬ。やつぱり、東洋道德の消極的なところもなくならぬ」といつて居られた。

今日の如き世界、活動的な精神のみある西洋道德の時代に、悪いことはせぬといふ支那流の道德をもつと高調せねばならぬ。他に迷惑をかけぬといふ道德が必要であるといつて居られた。成程聞いて見ると支那人は儉約する。支那人は辛抱する。支那人は怒らない。これ位消極的な國民があらうか。

しかし乍ら、長所は缺點と謂はれる通り、支那人は、辛氣なく國民である。

### 型にはめて生活する

支那人は物事をなすに、年中行事的に、或は一日行事的に、きまつて生活する國民である。何時種を蒔き、何時草をとりといふ風に、殆んど決めてゐる。

人が死んだら、どの色の着物を三ヶ月着て、次の三ヶ月はこの色の着物を着るなどときめてゐるから、頭をその都度々々用ひんでもいい。それで女中(阿媽)を用ゐるとこれをして、あれをして、それから靴を磨いて、洗濯して何をするといふ風で、毎日同じことをその順序でやつて行く。で、若しも「今日は靴を磨かんでよし」といふ風にいふと、もう次の日から靴磨きの時、磨くべきか、磨く必要ないか頭をひねらねばならぬから、磨くべきであるにも拘らず、もうその手を抜くことになる。

支那の教會が會衆の多いのは、日曜日に教會へ行く一週行事であつて、他の國民の如くに、一寸考へてそれから行くといふのと違ふから、畢竟會衆が多いのである。従つて教會の空氣は生々溼溼でないが、人数は多い。

頭を用ひず、習慣性にて生活を決定して行くのは、極めて東洋的であるが、支那人に於て尤も甚だしい特徴である。

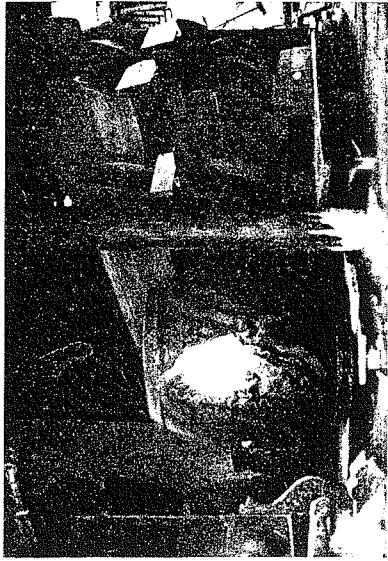
然しこの生活様式の可否は、利害相半するものらしい。一々頭を働かさぬから、長續きし、あきぬし、氣をつかはぬし、大層呑氣に生きられる。その代りに人間が鈍重になり、熱がなくなり、創造的などころがなくなる。

### 痺氣を嫌ふ

支那人は、あの人は痺氣がひどいとか、無いとかいふ。痺氣といふは、日本語の癩とか、癩癩とかいふやうな慢性的になつたものであつて、支那人が實に嫌やがるものである。

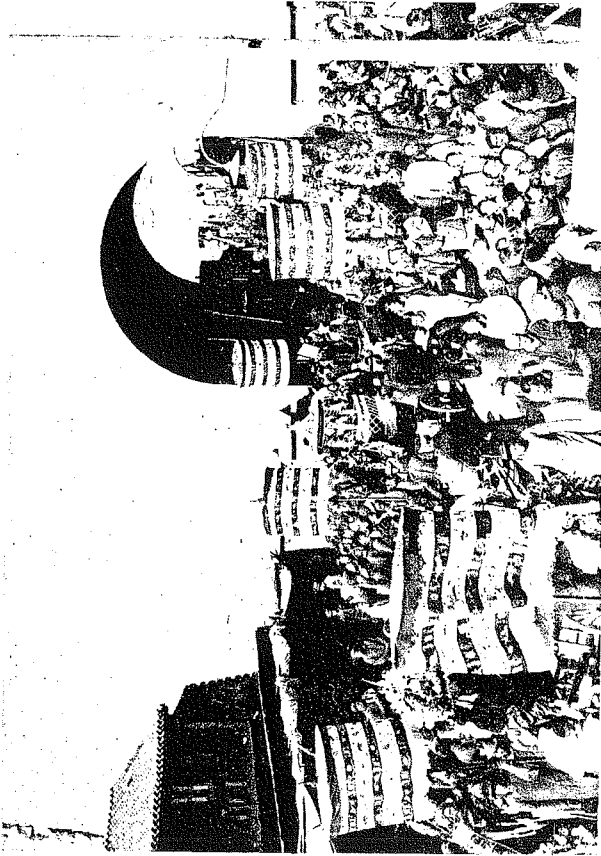
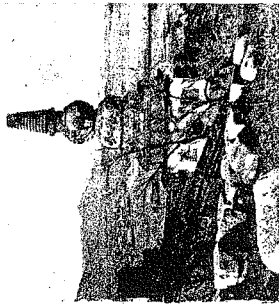
阿媽でも、僕役でも、痺氣のわるい太々だと勤めるのを嫌ふから、雇はれるとき

痺氣を嫌ふ



村

蒙古風の墓



式葬なん盛

### 支那人の残忍性

支那人はおとなしい國民であるが、それは鳩の如くおとなしいのではなくして、猫の如く素直なのである。目をほそめて喉をゴロ／＼はせてゐる間はよいが、時には爪を立て、搔きむしられることもある。先年わたしが、奉天に居た頃、彼處の泥棒市場に、一つの見世物があつた。胴體は犬で、顔は人であつた。

毎日この見世物が人足を引つけて、市場は大繁盛であつた。すると或日のこと、遼陽から来た一人の商賈人が見てみると、その半人半狗が、目から涙を出してめそ／＼泣くのである。その商人も心引かれて、徘徊屢々どうも去り難い思ひがしたので、一旦外へ出たものの、もう一度入つて見てみると、ふと思ひ出したのは、彼の兄の子が、幼少の時に、行衛不明になつたことである。そこで直にそれを警察に届けた。警察は

直に醫師について調査すると、果せる哉それは彼の朝であつて、舌が上顎にとちつてあつた。そして、體は、生きた犬の皮を、ひとしく皮をむいたその子供の體にぬいつけたものであつた。そこでその見世物の香具師は、その市場で衆人の見る前で、斬罪になつた。

またこの度の事變でも通州の保安隊は、母親の前で、その嬰兒を地べたにぶちつけて慘殺した。そしてその母親が卒倒したのを見て去つた。後その母親が卒倒から甦つたので、その赤ちやんの慘殺がわかつたのである。このやうに、柔和なる支那人ではあるが、極端から極端に、残酷なことをするのである。

### 禪の話

日本の服装の中で、日本固有のものは、先づ、男の禪と、女の腰巻位のものであ

らう。そして、それは多分、南洋民族の傳來であらう。

日本服は支那の服から、多分の影響を受けたけれども、日本人は禪と腰巻とを愛用して、遂に支那の褲子といふズボンを脱ぎ捨て、仕舞ふた。

支那には、禪に相當するものがない。之れは西洋にもない。本文の記者は今、順徳の旅先で、皇軍の慰問をしてゐるが、宿屋らしい宿屋がないので、この地の米國宣教師の邸宅に宿泊してゐる。今日、餘つた慰問袋の一つを、その宣教師の夫人ミセス・ジエネスにお上げした。すると、ジエネス夫人は、袋を直ぐと開けて、中からキヤラマルやらタオルやらを一つ一つまみ出して、大喜びで、一つ一つをお客に見せた。そして最後に出て來たのは、禪であつた。ジエネス夫人は、これはエプロンであらうといつて、越中禪の紐を首にしばつて、女にはしやいだ。

わたくし達は之れを見て、全く穴あらば入り度く思つた。

孝仁義禮智信勇を忘れたものといふ意味も昔はあつたものといふが、兎に角王八旦といつたら、到底も怒る。

### 雨を豫言はせぬ

日本人は天氣のことを喋つて、挨拶とするのであるが、支那人はたいてい、先方の年齢を聞いて、高壽々々といつて、その元氣なことを祝したり、その子供の數を聞いて、造化々々といつて、その子福者なることを祝したりするのを挨拶としてゐる。

日本人も西洋人も、よい天氣ですねとか、よく降りますね、明日も雨でせうかねといふ。何といふ美しい天氣でせう、といつて見たり天氣のことばかりいつてゐる。

その癖がついてゐるから、支那人にも天氣のことを喋つて、うつかり、

「明日は雨降りでせうか」

等と尋ねやうものなら、支那人は變な顔してゐる。それは支那では、明日雨が降るかどうか聞くのは、最も人を馬鹿にした會話なのである。あんまり問ふと、我不知道といつて王八に聞けといふ。王八といふのはスツポンのことで、支那人の最もいやがる動物なのである。どういふわけか支那人はスツポンを嫌ふ。丁度日本人が自分の口の中にあるものであるにも拘らず恐ろしくつばを汚れたものであるかの如く考へると同じやうに、スツポンは支那では、理屈ぬきの嫌はれものである。

そしてその王八が、雨の降る降らぬを最もよく知つてゐるといふのである。

### 北京人はのろい

支那人と一口にいつても、地方々々に依つて、特色があつて北京の支那人は、のろ

間な支那人中でも最も性が慢であつて、頭がさびく働かず、テキバキと物を處理できない。所謂極めて気がさかない、氣のつかぬ人間である。故に日本人にはしんきくさくて耐まらない。けれどもその代りに、のんびりして、至つて鷹揚であつて、品もよく、おとなしくて、靜的である。そして到底も美術的な好みを有してゐるから、北京が藝術の中心地として、近來、硝子カッタングや朱漆の彫刻、刺繡、布花、鐵花などの物産地となり、世界に輸出してゐる。一見北平は學都または遊覽地のやうであるが、其實世界到處へ北平の美術品を輸送してゐるので、工藝の町である。さうかといつて其工藝家の材料は一つも北平にないので、山東の博山の硝子を取寄せてガラス・カッタングをなし、美しい西洋人好みの洗指鉢だの花瓶を製作する。刺繡は四川湖南の麻布を取り寄せて、絲はフランスから輸入し、之れに刺繡するのである。麻のハンカチフはアイルランドからリネンを輸入して之れに、加工するのである。かく

の如くに北京に材料があるのでないが、どうしても北京人でないと、上製のものは出まらぬのである。何時だつたか、わたくしの友人が、汕頭かどつかで、リネンを安價に買ったといつてゐたが、汕頭のものなど、その粗なること、北京物に到底競争できない。

### 山東人は辛抱強い

北京や山東人など、支那人としては、中以下のものであるが、しかし特色はある。その辛抱強いこと、ねばりのあることは、大いしたものである。山東は昔から孔、孟その他がでたが、大體に於て、一教一宗を發祥せしむるところといつてよい。それだけに歸依雷同蜂起集合するところの特色がある。従つて迷信も特に多い。

さういふ地方色を有するから、頭にはぶいが、傑出せる人物も出て來るわけで異佩

字でも宋哲元でも、山東出身であつて、只の物ではないのである。

## 浙江、江西人は聰明

支那人で、上等な人間は、兩江即ち浙江、江西地方のもので、第一頭がよい。當代は何といつても頭の時代であつて、人間は象よりも弱く、獅子よりも臆病で、牛よりも忍耐力乏しく、馬よりも魯鈍なるにも拘らず、凡ての動物を征服せしは頭があるからである。今日兩江出身者が、支那の指導的位置を占めつゝあるのは、彼等が頭がよいからである。

大學教授の如きは大抵兩江の出身であるし、中央政府の要路に立つもの、財界を引き廻してゐるものも、目星しいものの、多くは兩江出身者である。

彼等は賢いことは賢いが、しかしもう一つ弾力性が乏しい。強いところがない。そ

こに蒋介石がヒットラーや、ムッソリニに輸する所以である。劣らないとしても、あくし果斷なる藝當をすべく餘りに頭が聰明すぎるのである。

## 湖南人は熱がある

湖南の人間は支那人に珍らしく熱がある。黃興の如きは代表的人物である。一體に支那人位、笛を吹いても踊らぬ國民はない。學生の示威行進を見てゐても、實に冷靜なものである。

救世軍の野外戦を見てゐても、實に靜かなもので英國國教會の集會見たいなもので、ゴッセルヤてな具合に心を踊らさない。東洋宣教會（ホーリネス教會）の祈禱會へ行つても、日本の組合教會の祈禱會よりも感動的でない。日本のホーリネスの祈禱などは、息を切らして、はあくいつて祈り、祈る一句一句毎に、周圍のものが、ど



うぞ」とか「アーメン、アー——メン」「オ、主よ」といふ風に調子づけ應援掛聲するので、到底も靈氣が動き漲るものだから、支那のは實に靜肅そのものである。此くの如き支那に在つてひとり湖南人には熱がある。であるから、清朝をたほして回天の大業を爲せしは湖南の青年であつた。げにことわりなる哉である。

さき頃北支が日本との交渉が複雑になるにつけ、北京で落ち着いて教育ができぬとあつて、清華大學の工科を魁として、各大學が長沙などの湖南に移る計畫があつたが宋にあつては朱熹の如きが、湖南に嶽麓書院を設け、清にあつては王船山が衡山に隱退してるが、あすこにも昔から石鼓書院があつたのである。して見ると教育家がやはり昔も今も湖南人を手鹽にかけて見やうと思ふだけに、湖南人の熱を買つて出るのである。群集教育の實驗區として有名なる定縣の如きも、近く湖南に移されるさうな、湖南人を教育して見ることは、時局の如何に拘らず、面白いであら

う。

## 廣東人の協同力

支那人は何が不得手なといつても、會社を作る位不得手なことはまたあるまい。

しかし廣東人だけはそれができる。

何故支那人は會社を作ることが不得手だといふと、あまりに利己的であり、個人主義であるからである。會社を作ると、まだ利益の上つて居らぬのに、配當を要求する。

そこで蝸配當をやらねばならぬ。

その上に株主は、自分の親戚を入れて、社員にせんとする。そのために、會社は掛名的差使といつて、會社に出頭せずに、只給料日だけ行つて、給料を貰ふものが日一日と多くなり、遂には月給の少額のもの、實際の仕事をして掛名差使のものが、

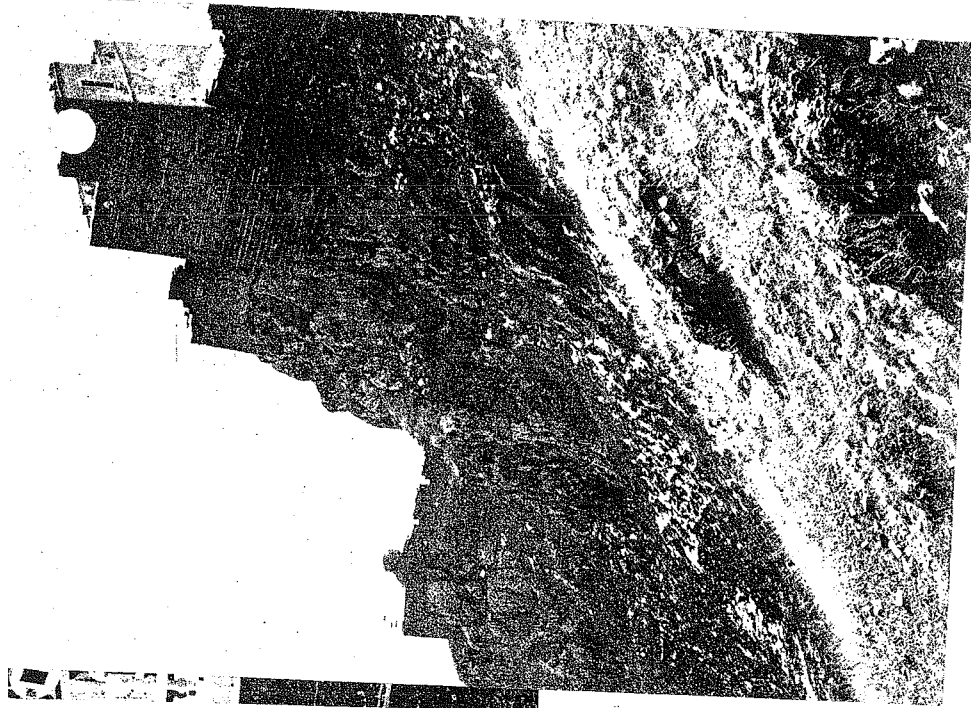
大金の給料を取るやうになる。かくて會社は潰れるのである。

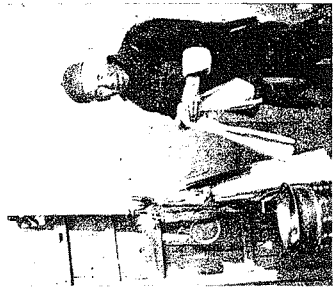
然るに珍らしいことには、廣東人はそれをやらぬ。だから、支那の大きい會社は、大抵、廣東人によりて經營されてゐる。先施公司でも、中原公司でも、大きいデパートは何れも廣東人の掌中にある。

廣東はしかし乍ら、あまりに、御都合主義者である。梁士詒でも梁啓超でも、決して彼等は吳佩孚や段琪瑞の如き肌合の人物ではなかつた。

しかし乍ら大體に於て、廣東人は、進歩的であつて、革新的思想や、リベラルな頭を持つてゐるものが多い。まあ、支那人で垢ぬけているのは、廣東人であるといつてよからう。

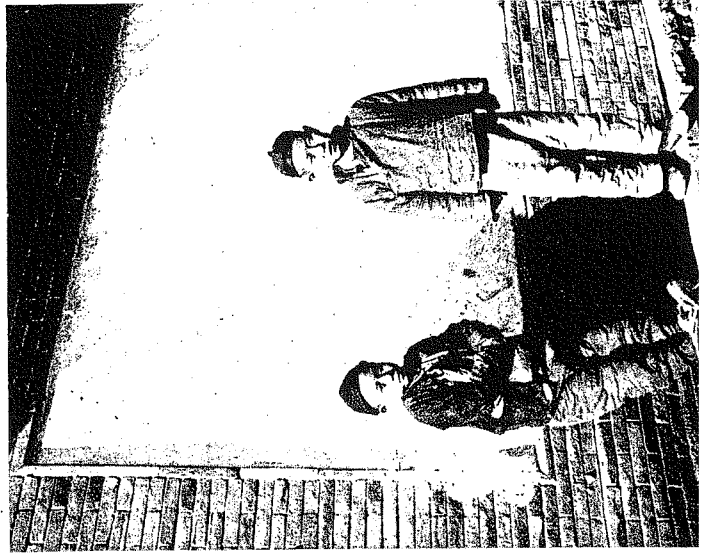
### 上海人は日本人に似てる



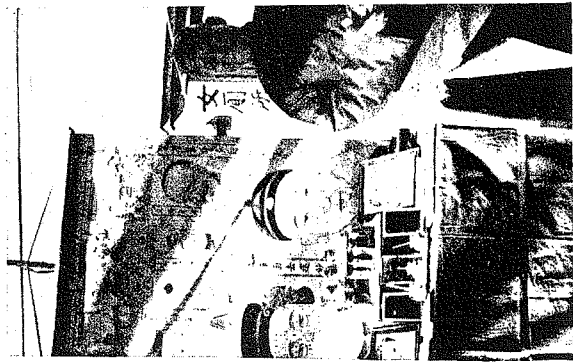


頭の床屋

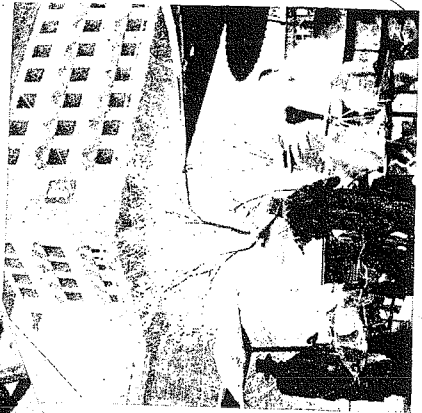
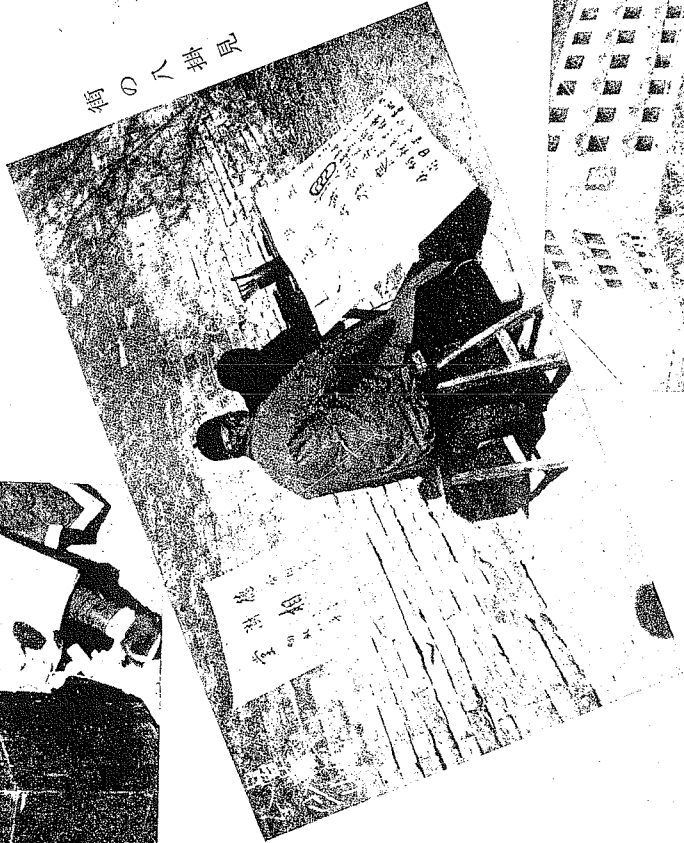
縁遠の子供



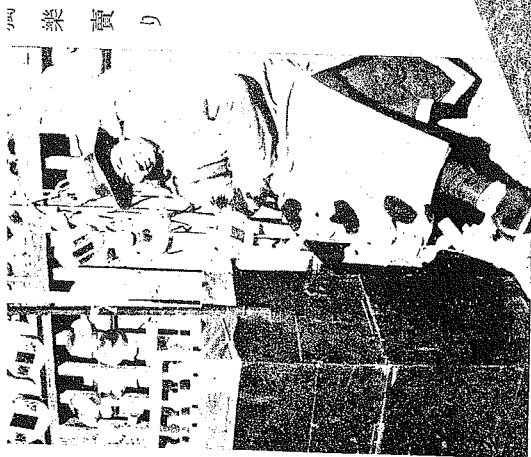
運命判断



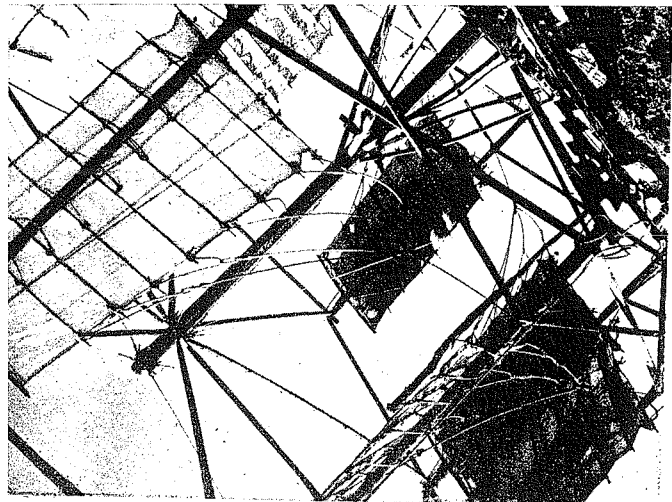
柄の人掛見



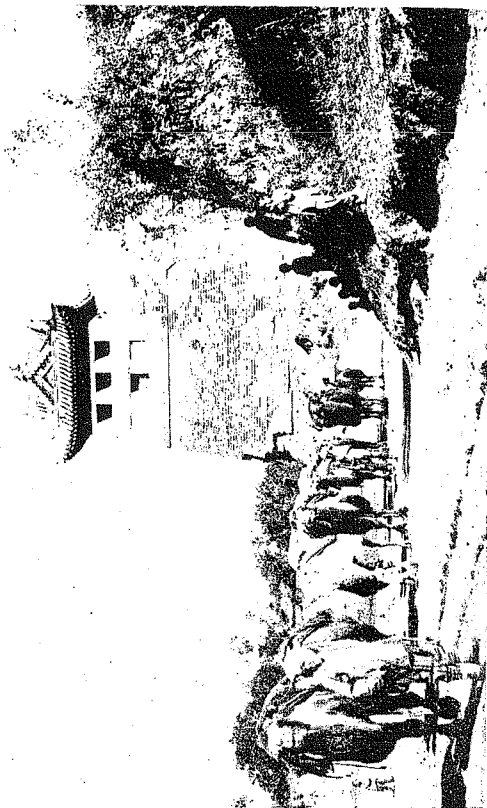
路傍の飲食店



樂賣り



海水をくみ出す風車



支那人中、最も、日本人の氣質に似てゐるのは、その聲音の似てゐる福建人でもなく、徐福以來渡日したらう所の山東人でもなく、上海人である。

福建人の聲音が、日本人に似てゐるのは、それは多分日本に傳つた昔の支那の中央言語が、支那の邊境に残つてゐるといふ支けのことである。だから最も上手な支那語を使ふ日本人でも、福建音だけは抜けない。支那語の名人なる原田書記官は、恐らく日本人中最も清楚した支那語を喋れる人であらうが、それでも長年北京に住みし福建人ではないかと、疑はれるところがある。

上海人が日本人に似てゐるといふのは、氣質の上から似てゐるのであつて、物をいはれぬ中にせつせとする。凡ての支那人はいはれぬば手を出さぬもので、氣をさかしてすることをせぬ國民である。然るに言はれんさきに、自分で考へつては、物を處理するのが上海人である。それであるから、その容貌も日本人に最も近い。

上海人は日本人に似てる

支那人中、日本人と一緒に仕事をして、最も氣の合ふのは、蓋し上海人ではないかと思ふがどうか。

先年、わたくしは、上海の内山書店に、數日の食客をしたときに、二人の半パンツを穿いた少年を見た。そして、それが、一人は日本人で一人は支那人であることを聞いて驚いた。その氣のきいた顔、その機敏な所作、全く同じであつた。

### 四川人は熱もあるが賢くもある

四川といふところは、これまた支那にて一國の觀あるところで、非常に變つてゐる。わたくしは去年行つたのであるが、亞熱帯であるから、砂糖もとれるし鹽も井戸から吹き出し、綿、煙草、阿片等必需品は何でも産する所であつて、今日の如く支那が貧乏してゐるのに、ここは銀貨がザク／＼して居て、物價も安い。

それで文化も案外進んでゐて、重慶の町の如きは、支那第一流の都會である。洋雜貨の如きは、北京や漢口から十日もせねば着かぬのにどうしてこゝに安いかと思つた。

四川の人々は一種の熱があると思ふ。日本の信州人に似てゐる。わたくしの知つてゐる四川人を一人々々頭に浮べて見ると、中には排日に熱するもの、共產主義に熱するもの、企業家として熱するもの、非常に血が熱いやうである。顔の人相も餘程けわしい。

その癖、木村長門守の如き四川人のあるを未だ聞かぬ。

しかしさういふ熱ある人々と雖も、四川人は信州人のやうに、剛通も思ひ切つてよい。ある信州人が、帝大の總長になつたら、クリスチャンであるにも拘らず、諸君大に飲まふではないかといつて、散財したさうであるが、基督教主義の大學の總長になると、先づ恭やしく祈禱したさうである。四川の人で日本人をワイフにしてゐる新聞

記者が、非常に排日を提唱してゐたが、北京が支那内戦で騒がくと、彼の家には日章旗が翻り而かも、その日章旗は餘程俄仕込みのものであつたか、白い古着のネルに、赤い木綿の日の丸が縫ひつけてあつた。

四川の學者の廖平は、支那近代の新思想の尖端をきつて康有爲の魁けをしたが、晩年張之洞に廝されてその思想を自らくつがへし豹變しちやつた。

共産黨に奔つた四川出身の學者も、共産黨が振るはないと名を變へて、地位を得てゐるやうだ。かくの如くに、四川の人々は熱はあるが、首陽山に入るの慨はないやうだ。それであるから、天下治つて猶蜀の治るを見ないわけである。また熱があるから「天下の亂るゝ蜀よりする」と謂はるる如く、近くは清朝は四川の鐵道問題から潰れるに至つたのである。即ち鐵道國有問題で四川が先づ騒ぎ、清朝は之を鎮壓せんとして反つて、その鎮壓の軍隊から、辛亥革命が起つたのである。

## 滿洲人の氣力は失せた

滿洲人の知人は少くない。どちらかといふと、私共には接觸の多い方である。車夫にお前の小さい時は何處に住んでゐたかといふと、交民巷の哈達門の傍だといふ。今は外人のテニスコートのあるところだ。阿媽にお前の家は何處だつたと問ふたことがあるが、臺基廠だといふ。公使館區域の臺基廠ならば、稅關の官宅のあるところで今は特務機關の公館がある。あの様な處にあつた邸宅ならば必ず相當なものだつたらう。何でも阿媽の子供のときは、家に轎車が自用车としてあつたそうなる。俵夫は幌車でもう一つ格が上つた。私共の學校の生徒で貧しい衣服の中から、目鼻立の見目よい顔を出してゐる子供は、大抵滿洲旗人のちちぶれたものであつて謂はば貧乏士族である。従つて貧しい癖に洗練されてゐる。

これらの満洲人の外に、今日も相當に活躍してゐる満洲人を澤山知つてゐる。

また王府の子息子女も何人も手鬮にかけた。已に満洲語は死語になつてゐるし、満洲人特有の纏足しない風習も、今は漢人の婦女が放足してゐるから、區別はないし、満洲婦人の大袈裟な鬚も、もう見られぬから、どれが満洲系支那人か一見區別がつかぬ。只、子と親とが、姓を異にしてゐる位のところ、漢民族と違ふだけである。しかし暫くつきあつてゐると、問はなくとも解かるやうだ。

満洲人について第一に感ずることは、これでは漢民族を再び支配することは全く困難であるといふことである。彼等は丸で漢民族に同化され盡してゐるし氣力といふものが殆んど失せて仕舞つてゐる。凡そ他民族を支配しやうと思つたら、氣力がもつと旺盛でなくてはならぬ。

また漢人には排滿興漢の氣風はあるが、満洲人にはもう民族的觀念が丸で失せてゐ

るやうだ。

而かもその上に漢人系の支那人の如くに、がつかつた勤勉がない。支那人といふものは一錢のお金にでも執着するものであるが、特に山東出身のものなどになると、幾らかにでもなるならとても頑張るものだが、満洲系のはそのがつかつた所はないやうだ。

それが故に、彼等は何れの階級でも、浙江のものや回々の徒にあされてゐる。

### 回々は相互扶助に生く

回々族の人々は特徴がなかく多い。際だつて漢族と性質を異にしてゐる。わたくしの子弟にも回々族のものはかなり多いから、受け賣りでない觀察を申上げるであらう。

回々族の人々はなかく勤勉であつて、階級でもトップを切るものが多い。そのね

ばりの強いこと、到底漢人は遣ひつかぬ。頭はたいしてハツキリと澄んではゐないが、實によく頑張つて努力する。わたくしの生徒に、黒といふ娘がゐたが、ずばぬけて一番であつた。

基督教は兄弟愛をなかく證ぐが、實際は兄弟争をやつてゐるのである。牧師同志でも兄弟と互に呼び合ふのは、祈禱の用語に過ぎなくて、好んで、互にデマとゴシップとそれから噂とを飛ばし合ふてゐる。牧師は大抵勞働者の無責任に放つたゴシップから、しくじり、興を上げるのである。であるから兄弟愛を説くけれども、兄弟争を實行してゐると謂はれても仕舞がない。

基督教の信者もまた兄弟姉妹といふ祈禱用の常套語を有するけれども、教會はゴタゴタだらけであつて、丸で御殿女中の心理に生きてゐる。

かかる場合に於て、回々族は如實に、兄弟愛を實行してゐる。で、回々族の相互扶

助といふものはとても根強い。回々に乞食なし、といはれるのもそのためである。がしかし回々族は、同族外のものには、非常に利害である。利害といふ意味は、えげつな

いとも譯すべきである。

もう一つの回々の特徴はきれい好きだといふことである、漢人でも不潔好きではあ

るまいが少くとも不潔厭はずだ。その衣服が垢泥であつても平氣、その皮膚が黒くサ

メのやうになつてゐても、朗かに嘯いてゐられるのである。多分支那人がこういふ不

潔厭はずになつたわけは、この紅塵萬丈の世界、水の少く薪炭の貴い國に住む裡に、

自然に負けちやつたのであらう。然るにこういふ不潔の國にありて、回々は手足を毎

日水にて洗つてゐる。従つて回々教の人々は、きれいでなくては困るところの職業を

商つてゐる。食堂の風呂屋だの、饅頭屋、饅頭屋の如き、きたなくては困る仕事を

回々が多くやつてゐる。

回々は相互扶助に生く



回々の人々は儼然とした心を持つてゐる。けれども、一旦怒るとなると、結束して怒る。天津でも、北京でも何々の新聞が、回々を罵倒したら、一度とも回々が新聞社を襲ふて、活字をひっくり返して仕舞ひ、新聞社はひどい目に逢つたことがある。回々の人々は口先がうまいが油断が出来ぬ。その他回々教そのものについては、また他日一卷の書に纏めて述べるであらう。

## 附 録

— 新東洋文化の建設のために —